

サーンチー遺跡の起源について(1)

宇治谷 顕

サーンチー(Sanchi)遺跡については、すでに諸先学により幾多の研究業績が紹介され、多くの論議を生み出している。しかしながら、その論究の中心課題は美術的見地からの考察であり、塔門レリーフの主題比定や構造上の問題などが主流になっている。これらの論究に較べサーンチーの歴史的考察、及びその展開などについては考古学的調査の報告が主であり、未だ検討を要する疑問が山積しているように思う。

現在までに公表された考古学的調査、及び研究資料を再吟味し、また仏文献等の相当箇所を探りながらサーンチー遺跡の歴史的過程を論じることにはたい。サーンチー遺跡の論究のための基礎的資料は一八五四年に報告されたカニンガム氏の調査報告資料、及び一九一二年から一九九年にかけて実施されたマーンシャル氏等による調査報告であり、一九四〇年に発刊された三冊の報告書である。また一九五六年、マーンシャル氏個人によって発刊されたサーンチー遺跡の手引書というべき『A Guide to Sanchi』も貴重な資料である。これらの

基礎資料を基にサーンチー遺跡の初源の様相、及びその起源について考察するが、考古学的資料は未だ乏しく、また仏文献等の伝承にもかなりの創作的部分を含んでおり、多分に推測の域を出ないところである。

サーンチー遺跡の現存する位置を仏教興起時代に比定すればアヴァンター(Avanthi)国内であり、都ウジシェーニー(Ujjaini)の東方ヴィデーシヤ(Vidisa)に近接していた。この仏教興起時代を第一期とし、試作的に時代区分けをして考察する。まず第一期は仏教興起時代、第二期は釈尊滅後一〇〇年頃、第二結集が開催された時代、第三期はその後、アショーカ王がサーンチーに小仏塔を建立し、その傍らに小石柱を残した時代、第四期は紀元前二世紀シュンガ(Sunga)王朝期にストゥーパ(stupa)が拡張され、ほぼ現存する遺構をなした時代とする。

まず仏教興起時代、釈尊の教えは各階層、民族などの枠を越え自由に、かつ平等にわけへだてなく説かれたのであった。

さらに仏伝の伝えるところによれば、その中でも商工業層の
帰依者が多いことに注目させられる。釈尊の支持母体は商工
業者であったと言っても過言ではあるまい。釈尊滅後、仏教
宣教活動の社会的基盤を支えていたのは商工業者であり、
それらの人々の活躍なくして仏教の地方流伝はあり得なかつ
たと思われる。この点に関して中村元先生は次のように語ら
れる。「マウリヤ王朝時代の仏教、少なくとも考古学的遺品に
関して見る限り、後の時代においても教団の盛衰消長は一に
商工業者の運命にかかっていたのである」。この見解は大い
に評価されるべきであり、サーンチーの碑銘文を見れば比丘
・比丘尼・男女の在俗信者が寄進者として個人名を多数残し
ており、彼らの多くは長者と呼ばれる商工業層の人々であつ
た。マウリヤ王朝期以後の仏教展開と比較する時、この時代
までの仏教は民衆的・大衆的性格を有していたと言えるので
ある。

これらの商工業者の往来した商業ルートには、北と南の通
商路が伝えられており、特に南の通商路 (Dakshinapatha) と
してサーヴァッチー (Savathi) からパチッターナ (Paithā-
na) への道が栄えていたことが知られている。『スッタニパー
タ』(Sutta-Nipata) にはバラモン僧バーヴァリン (Bararin) の
婦仏の話が伝えられており、そこには彼の弟子達はアラカ国
の首都パティッターナ (Paithāna) からサーヴァッチーへの

サーンチー遺跡の起源について (一) (宇治谷)

行路が示されている。まずマーヒッサテイ——ウジェーニー
——ゴナッダ (Gonaddha)——ヴィデーシヤ (Vedisa)——ヴ
アナサ (Vanasa)——コーサンビー (Kosambh)——サーケータ
(Setta) を経てサーヴァッチーに到着したと伝える。

また、ジャータカ (Jataka) 文献にも、ペナレスの商人がウジ
エーニーに旅行したことが伝えられている。

このように多くの仏伝文献はアヴァンテーの都ウジェーニ
ーとサーンチー近郊の町ヴィデーシヤは通商路上に存在した
ことを伝えており、仏教興起時代からかなり栄えていた町で
あったことが推察されるのである。レヴィ氏の見解によれば
ゴナッダはサンスクリットの Gonarda に相当し、サーン
チーに近いところにあつたらしいと推測するが、その根拠は
示していない。

釈尊の十大弟子であるマハーカッチャヤナ (Mahākaccāya-
na) は西インド (バルカッチャ) 出身の僧であつたと伝えられ
ており、仏教興起時代すでに西インドにまで釈尊の名声がと
どろぎ、仏教はかなり広範囲に伝播していたものと思われ、
これら伝播の担い手は商工業者の往来人であり、彼らの功績
により通商路上の要地にそれ相当の仏教建築物が建立された
ものと考えられる。

第二期は釈尊滅後一〇〇年頂、第二結集がヴァイシャリー
ーでおこなわれた時代である。釈尊滅後の仏教流伝の様相、

八一

特に地方教団の展開や、その動静を推察してみる。第二結集は、その模様について諸部派の伝承に部分的には相違があるものの、十事の問題を提起としてヴァインジャーリーで集会がもたれたという点では一様であり、また釈尊滅後一〇〇年とされるのも同様に伝えられており、史実として認められるのである。

便ち伝承によれば、ヴァッヅ族出身の比丘等がヴァインジャーリーに集まり、食事・作法・教団運営・金銭受蓄など十種の行為に関して戒律を緩めるよう要求したのに対し、保守派の長老や、西インドの長老達がこれに反対し、ヴァインジャーリーに七〇〇人の比丘を集めて結集を開き、十種の行為はすべて非法であると斥けたと伝える。保守派の長老ヤンシャ (Yasa) はアヴァンテーとダッキナーパタ、及びパーテヤッカ (Pathavyaka) の比丘達に応援を求めたと伝える。従ってアヴァンテーには十事を非法とする長老派の比丘たちが多く住していたことが推察される。

これらの伝承から、当時 (釈尊滅後一〇〇年頃) には各地の教団もそれぞれ独自の活動をしており、それに伴い地方教団もかなりの特徴を提示していたことが窺える。第二結集はガンジス河中流域の諸都市により安直な生活、豊かな状況の中で恵まれた生活に慣れた比丘と遠隔地の厳しい環境のもとに修行と布教の生活に精進していた比丘との対立ともみられ

る。今これだけの資料から当時のサーンチー地方の仏教事情を推察することは至難ではあるが、現在するサーンチーの立地的状況をみる時、都ヴィデーシヤからの距離、及び小高い丘の上、民家から隔った静寂の地などの事由から鑑みて長老派の指導による仏教センターが設けられていたものと思われるのである。しかし、この推察は考古学的発見にこの時代に溯る何物も発見されていない現状では単なる推測に留まるものである。

第三期は現存する遺構から確認できうる時代、便ちアショーク王が小仏塔を建立し、小石柱を残した時代である。しかし、これらのサーンチー遺跡からの考古学的発見も現状では未だ確固たる証拠を与える程の資料ではなく、サーンチーの初現の様相、及び歴史を考察するに際しては、推測を余儀なくされるのである。

第一塔の現存する容姿はアショーク王創建当時を物語るものではなく、アショーク王建立の昔ながらの姿をとどめているのは南塔門傍に残存する小石柱のみである。この石柱には碑文が刻まれており、破僧伽の行為を誡めている。

また、スリランカ史伝には次のような興味ある伝承が伝えられている。すなわち「アショーク王はかつてウヅジェーニーの副王であった時、ヴィデーシヤに至り、そこでデービー (Devī) 妃を娶り、ウヅジェーニヤとマヒンダ (Mahinda) の二

子とサンガミッター (Sanghamitta) の娘をもうけた。後にマヒンダはアショーカ王の命を受けスリランカ伝道のため、その準備に四人の長老を率いてこの地を訪れる。母デービーはヴィデーシャの近郊の支提耶祇離 (Chetiyagiri) の僧院に住しており、マヒンダはそこに一ヶ月滞った」と伝える⁸⁾。

この大史 (Mahāvamsa) に伝えられる支提耶祇離はサーンチーの地に比定されている。マーシャル氏もこの支提耶祇離は多分サーンチーを示すものであろうと推測するが、ただし『大史』の伝承が正しいとすればと注釈を補なっている。現状の解釈において支提耶祇離をサーンチーに比定する根拠は、ヴィデーシャ近郊にはアショーカ王時代に朔りうる遺構は現サーンチーの遺構をのぞいて他所に存在しないことを理由としている。しかし、サーンチー周辺の遺構、例えばソーナーリ (Sonari) ・サットダーラー (Sardhara) ・ジュパリーヤ (Jupaliya) ・アンデル (Ander) 等の遺構は一八五四年のカニングム氏の報告以来あまり新しい調査報告はなく、未だ解明せられざる点が多数残っており、この見解には今一度の詳細なる調査研究が必要であると感ぜられるのである。故に、これらの論拠をもって支提耶祇離をサーンチーと比定するのはあまりに早計ではなからうか。

『摩訶僧祇律』には枝提山中に持律尊者たる樹提陀婆が住しており、ある比丘が戒律上の疑問を持って枝提山の樹提陀

婆を訪ねると伝える⁹⁾。この時、比丘はヴァナーラシーからコーサーンビーを経て枝提山に至ったという。前述した南の通商路、及び『異部宗輪論』が伝える大天 (Mahadeva) の南インド開教と彼が住したという制多山との関連を思う時、枝提山と制多山とは何らかのつながりがあったと考えられるのであり、枝提山とは南の通商路の線上に存していたと推測するのである。

サーンチー遺跡の謎とされるのに、中国からの渡来僧である法顕・玄奘の記録にサーンチー遺跡が伝えられていないことが挙げられる。このことは様々な事由が考えられるが、少なくとも現存するサーンチーの位置関係から見ると、ヴィデーシャを通過する南の通商路からはやや隔っており、そのことが一つの要因として考えられるのである。故に、法顕、玄奘がこの地を訪れた時には折悪しくサーンチーは一時の盛況を失っており民衆の話の中に登場しなかったことに起因するものと考えるのである。

『摩訶僧祇律』に伝えられる枝提山とはある特定の地域を指すものではなく、大衆部派内の僧院の構築上の名称用語であったとも考えられ、そのようにして考えれば相当数の支提山と呼ばれる僧院が存在していたとも考えられるのである。

『大史』の伝える支提耶祇離と大衆部が伝持する『摩訶僧祇律』の支提山とも関連づけて考える点に多少の無理は認め

ものの、その性格は同一視して見ることも可能であると考
えるのである。

第四期としては新たに第二塔が建立され、また第一塔がほ
ぼ現存する遺構を示す容姿に増広された時代、すなわち紀元
前二世紀のシュンガ王朝をいう。

第二塔は、外周を欄楯によってかこまれ、第一塔のように
塔門は存在しないが、欄楯のそのほとんどが残存し、塔創建
時と同時代の建立とされる。塔内からは伝道師達の名前を刻
んだ舍利壺が発見され、その壺銘文からサーンチーの古代名
が *Kākanāva* または *Kākanāya* であったことが知られる。

銘文に現われる *Kākanava-Pabhāsana* の名前はサーンチー
第二塔第二骨壺内の *Vāchi-Surjāyata* の遺骨の寄進者とや
れ、アンデル (*Andher*) 第二塔の碑文によれば *Kodīna* 姓
の *Goti* の子とされる。¹⁾ *Kākanava-Pabhāsana* はモー
ガリプッタテイッサ (*Moggaliputtatissa*) の師であるとする説
もあり、²⁾ もしこの説が正しいとすれば、サーンチーは多くの
高僧・指導者達を輩出した西インド仏教僧伽の中心地であ
り、各地に伝道師を派遣するための要地であったことが偲ば
れるのである。第三塔からは、長老のシャーリプトラ (*Sari-
putra*) とマウドガリヤーヤナ (*Maudgalīyāna*) の舍利が発見
されており、このことから、当時のサーンチーの隆盛のほ
どを立証するものである。

サーンチー遺跡の歴史を考察するに際し、試みに四期にわ
けてそれぞれの時代性を背景にサーンチー遺跡について論究
したのであるが、前述したごとく、その多くが推測の域にと
どまるものである。美術的方面からの考察に較べ、その解明
が未だ不十分とされる歴史的考察は課題であり、更に詳細に
わたる考察に努めることにしたい。

- 1 A Cunningham, 『*Bhīṣa Topes*』 London, 1854;
 - 2 J. Marshall and A. Foucher, 『*The Monument of Sanchi*』
3 vols, Delhi, 1940;
 - 3 J. Marsali, 『*A Guide to Sanchi*』 3rd ed, Delhi, 1956;
 - 4 中村元氏著 『*マウリヤ王朝時代における社会的基盤*』 二〇一
頁
 - 5 *Suttanipāta*, 976-1013;
 - 6 *Jātaka*, II, p. 248;
 - 7 Lévi, 『*Lévi Memorial*』 pp. 306-313;
 - 8 『*Mahāvamsa*』 cap 13;
 - 9 J. Marsali, 『*A Guide to Sanchi*』 p. 8;
 - 10 1 参照
 - 11 『*摩訶僧祇律*』 卷三〇、他、静谷正雄氏著 『*小乗仏教史の研
究*』 九三頁参照
 - 12 塚本啓祥氏著 『*初期仏教教団史の研究*』 五八〇-五九〇頁参
照
- △キールワード▽ サーンチー
(名古屋音楽大学講師)